

小督物語

——時代背景に基づく女人造型の考察——

李 鮮 瑛

はじめに

『平家物語』における女人造型は、かつて小松茂人氏が「平安朝の物語にはみることのできなかった、中世的女性の新しい価値の創造」と意義付けているように、王朝時代の後宮の女房や深窓の姫君たちの「古風な愛執に悶える女性」造型を脱皮して、ある種の気概をもち、激しい動乱の世をけなげに生きようとした人間造型として位置づけているのは凡そ定説に等しいといえよう。

即ち、王朝文学の女人が自分を取り巻くすべてを宿命としてうけとり、犠牲を美德としていたのとは対照的に、平家の女人たちが意志と理性で主体的に行動したという点で中世的女人の価値を見なしたことである。稿者はそのような造型性をもとに、小督の造型をほりおこして、近來歴史学でいわれている中世院政期という時代史とかみ合う中世的女人造型を確認しようとするのである。

その目論みで、稿者は先に「小督」の章における小督と高倉帝、そして清盛の関係を考察しながら、関連史料に基づく推論として物語の構想を考えてみた。その過程で確かめられたのは、諸本間にそれぞれのずれは見られるものの、延慶本に代表される小督の造型には、高倉帝への（貞節）を志して自分に向けられる藤原隆房の気持ちをきっぱり振り捨てるという、冷徹な女人の行動様式であった。そのような小督がみせる造型を小督

と高倉帝に働きかける清盛の行動と関連付ければ、物語の背景にある皇統継嗣の問題と（家）の論理という問題を推してみることができるのである。では、中世の院政期という『平家物語』の時代背景をどのように理解すべきであろうか。院政、それ自体に対する概念よりも、戦後なされてきた院政研究の観点を整理してみれば、院政という時代の構成要素を掴めることができよう。

院政は後三条天皇の荘園整理策によって摂関家に代わる受領層の登場その成因とするが、その成立に関しては、「領主制の成立という社会構造の変化が律令国家の衰退を必然化し、院政という政治形態を生み出した」とされる石母田正氏の論が未だに継承されている視点である。以後、それを批判しながら中世国家の成立を院政の成立期に求め、権門体制論で中世国家論となえるなど、院政の研究は、主に政治形態と社会構造や国政との関係の論議に基づいてなされてきた。

ところが、院政の本質を国政に関連付ける見解を否定して、河内祥輔氏が、院政の基本的な課題を皇位継承の問題に求めたのが近來の院政研究の新たな方向になった。これは院政の本質を国家権力に属する人事権・軍事動員権とする見解に基づけば、皇位継承権こそ人事権の究極で、それを無視しては院政が論じられないことでもある。

このように従來の研究の視点は院政の理解に示唆するところが大きい。が、皇位継承の問題に焦点を合わせた院政論は、本稿における物語を解く構想と深く関わっている。実際、院政と平家の関係は、治承三年のクーデターで後白河院政が停止されて平氏政権が成立し、その翌年二月には安徳天皇の即位で外戚の座をしめるが、それも束の間で、同年四月、後に源義仲や頼朝の挙兵の契機となる令旨を発する以仁王の挙兵が起る。排除された皇位継承が狙いであったこの挙兵を顧みると、平家滅亡に皇位継承の間

題がどれほど深く関わっているかが喚起されるし、従つて物語の構想に皇位継承の問題を読み解く必要性を感じるのである。即ち、院政期という時代を背景にすれば、『平家物語』の帝に寵愛をうけた宮中女人小督の悲劇は、平家一門の皇統継嗣に関わる執着がその構想にあるとみなされるわけである。そして、それは一方の小督という女人にとっては〈産む性〉¹⁾に関わる問題で、かつ院政期以来中央進出する武家社会における〈家〉という女人の役割につらなるものであった。

前掲拙稿では関連史料に基づいて以上のような推論を導出するにいたつたが、本稿では、外圧に揺さぶられつつも果敢な一面を固持する小督の造型を追いながら、それらが裏付ける物語の時代性を考えてゆくことにす

第一節 高倉説話の「小督」の章における主題——内裏出奔——

物語の導入部において小督は、想い人の藤原隆房より恋文を受け取つた時、「吾内裏ニ被召テ参ナム後、争御後グラク、カラムフシヲ見ルベキ」と言いながら、その手紙を「ツボノ内ヘソ投出」すといった冷淡な行動で男の想いを拒絶し、ここから高倉帝との恋愛談に展開されていく。そして、それが葵の前を失つた傷心の高倉帝を慰め、帝の寵愛をうけるという筋立てになるが、その高倉帝と小督の関係は清盛という権勢者の圧迫のゆえ内裏を出奔し、嵯峨の草庵に隠れるという悲運の小督を描くようになる。小督が内裏出奔を決意した気持ちには、延慶本では次のように綴られている。

始ヨリ申タカリツレドモ、世中ノウラメシサ、身程ノハツカシサニ
 (A) カクトモ申サ、リツレドモ、強ニ恨給ヘバ、難去加様ニ申也。
 (中略) 召出テ可被失ナムト聞ヘシカバ、心憂悲テ、ゲニモサ様ノ事
 アラバ、乍生恥ヲ見ムモウタテクテ、君ニモシラレマヒラセズ、人独

ニモ不被知シテ、内裏ヲ迷出候シ時ハ、イカナラム淵川ニ身ヲナゲテ、此世ニナキ者ト人ニ被知ムトコソ思シカドモ (B)、人ニ申合せシカバ、「淵川ニ入テ死ヌル者ハ、吾身ヲ害スル咎ニヨリ、悪道ニ落ル」ナムト申シ、事ノ怖サニ、今マデ思煩テ、水ノ底ニモ不沈、ツレナクカクテ候ヘバ、定テ君ハ、隆房ニ心ヲ通シテ、被隠タル歎ナドモヤ思召候ラムト、ハツカシクコソ候ツレ (C)。但是ニカクテ有ム事モ、只宵計也。明ナバ大原ノ奥ニ尋入、今ハ思立事ノ有ツレバ

自分の隠れ住いを探し当てた仲国に向つての小督の告白は、内裏をひそかに出奔した理由を釈明するところに目的がある。そしてその釈明を支えている彼女の言い分が「ハツカシサ」、あるいは「恥」の論理であった。告白の中で言及している三個所である。すなわち、(A)「世中ノウラメシサ、身程ノハツカシサ」、自分が内裏を出奔した行動は誰にも知らせたくなかつたこと。というのは、(B)清盛の手で強制的に内裏を追放されることは「乍生恥ヲ見ム」ことであり、つまり「ウタテ」きことであるからということ。ただそのため、(C)帝にも理由を告げないまま出奔したので「君」(帝)が自分の意図を曲解するのではないかと思うと、「ハツカシクコソ候ツ」ということ、以上の三つである。

この告白、「世中ノウラメシサ、身程ノハツカシサ」と「乍生恥ヲ見ム」というのは内裏出奔の理由である。ただ、帝の寵愛を受けていた最中、突然行方を暗ました女人として、ここの「世中ノウラメシサ、身程ノハツカシサ」を述べる理由は次の段落で考えるが、「乍生恥ヲ見ム」ことを避けて内裏を出た動機、「恥」とは何だろうか。それは帝の寵愛をうける身であるにもかかわらず、清盛の意に損なうという理由で「召出可被失ナム」といわれる己のことを「恥」と理解しているのである。自分には抗しがたい他者の力によって自己が操られることを苦痛と捉え、「恥」と表現するので

あった。それとともに、小督の「恥」が「身程ノハヅカシサ」と関わることも見逃せない。ここを一義的に解すれば、中宮を押しつけて帝に寵愛を独り占めする立場になったことが「身程」に過ぎた「ハヅカシサ」であると読み取ることができる。まさに後宮内における身分秩序を乱す自己の僭上行為への恥らいであったとみられるのである。当時の小督にあつてはそれが「身程」であつた。

〈恥〉の意識は、自己の外部（共同体）に存在する他律的な掟（規範）や倫理と結びつけて自らの言動を律しようとするときに生じるものであつた。とすれば、それは個人の感情を越えた領域になつていく。「身程」を自覚する小督においては、自分の僭上行為が共同体の内部規範を侵犯したと気づくことによる「恥」であつたし、それが極端に、自ら共同体（「世中ノウラメシサ」）を離脱するといつた行動に追い込んだのであつた。勿論逆に、他者の力によつて共同体から追放されるというのも「恥」でしかなかつた。小督は自己の行動、そして清盛の脅迫を、内裏（後宮）という共同体の掟に照らしながら、二重のかたちで「恥」を自覚せざるを得なかつたのである。それゆえ、他者の力に振り回される前に、みずからの意志で内裏という共同体を逃れ出たのであつた。

もう一つの「ハヅカシク」の場合は、一見すると、相手の帝の思惑にのみ結びついた感情のように見える。それに、これまで見たような他律性が欠けているといつてよく、私的な感情の動きとみられるが実はそうとは限らない。先に言及したことだが、小督は元の恋人陸房の求愛を、人に知られるかたちで拒絶してみせた。その態度は、高倉帝（個人）のみならず、皇統、言い換えれば天皇家の継嗣にかかわる貞節の表明であつたのである。これを前の「身程ノハヅカシサ」の表現に内包されている小督の心持の有り様と繋げて清盛への憤慨を秘めた句と捉えたら、相手の帝の思惑

までを念頭に入れ、自分の将来の立場を工夫した発言としてとれるのである。

貞節といえは、小宰相説話において小宰相が入水の間際に述べる「貞婦は二夫に見えず」という格言が想起される。『山槐記』¹に基づいて、小督の二十三歳にしての死、あるいは出家の決意を重視するならば、「水ノ底ニモ不沈、ツレナクカクテ候へバ、定テ君ハ陸房ニ心ヲ通シテ、被隠タル欺ナドモヤ思召シ候ラム」という告白は、一途な純愛の表明と同時に、自らからの〈産む性〉の封印の表明で、まさに貞婦の意識と結びついていたと考えるべきである。前掲の格言は、女人（婦・嫁）がみずからの〈産む性〉を〈家〉に禁縛する決意の表明だからである。

ただ、この延慶本の小督の告白を一義に読み取ることにはできない。この告白を小督・高倉帝の関係における文脈として読まれる一方で、これを二人の背後に潜む清盛と小督の対立関係の文脈としても読めるわけである。

乍生恥ヲ見ムモウタテクテ、（中略）内裏ヲ迷出候シ時ハ、イカナラム
淵川ニ身ヲナゲテ、此世ニナキ者ト人ニ被知ムトコソ思シカドモ

とある（B）の内裏出奔の動機とその後の自殺決意を再考し、ここを対清盛の関係で解釈すると、小督を内裏出奔に至らせたのは、彼女自身が受けるかもしれない「恥」を避けるためであつた。帝の寵愛を受けていた最中、「乍生恥ヲ見ムモウタテクテ」という理由で、宮中生活を断念する女人としての造型は、「イカナラム淵川ニ身ヲナゲテ、此世ニナキ者ト人ニ被知ム」というところと連動して性格の気丈さを窺わせるのである。というのは、この「人」とはいうまでもなく世の中の人々であるが、「此世ニナキ者」と見せびらかす意図で「身ヲナゲ」ようとした意思を明かす造型を勘案すれば、当然権勢者清盛に対する表現と見られるからである。

即ち、小督にとつて「此世ニナキ者ト人ニ被知」ようとすることは、「取

テニナニ」そうとする清盛の横暴から逃れるための方便で、それはそれで弱者なりに示す抵抗の意志と取れる。ただ、前の「世中ノウラメシサ、身程ノハツカシサ」との関連から考えてみると、違った意味が表われてくる。つまり、このように隠れ住む境遇に追いこまれた身の「ウラメシサ」と「ハツカシサ」を吐露しているところは、弱者のか弱さよりも、世中への一すなわち清盛に対する一恨みとして受け取れるのである。したがって、その恨みの発露として、清盛への抗議を込めて「此世ニナキ者ト人ニ被知」ようとしたのである。それを清盛の懸念の皇統問題と関連付ければ、清盛に「此世ニナキ者」と知らせることで、女人の「産む性」を封印したことを宮中の内外に伝えさせ、帝への不当な圧迫を防ごうとした意図として捉えることもできよう。小督の造型をこのように解すると、そこには宮中女人のか弱さよりもむしろ気丈さがあきらかになつてくるのである。

延慶本の当該箇所の解釈は以上のごとくであるが、それに対応する諸本（巻六相当）を見てみると延慶本の小督の造型性が浮き彫りになる。まず盛衰記は次のようである。

入道の世にも怖き事共申すと閑侍りしかば、難面存へて我も憂目を見
ば、君の御為も御心苦し、いづくのいかならん所にてても、我身一人こ
そ消も失なんと思ひ、内裏をば潜在忍出ぬ、いかならん淵川にも入、
如何にも成べかりしか共、住馴し人々の行末をも聞、今一度君の御言
傳をもや承と思ひ、所縁ありて是に此程侍りつれ共、傳を承事もなし、
思へば中々身も苦し、明日よりして大原の別所に思立事候て
この小督の告白には、延慶本に見られるような気丈な造型は窺えない。
特に「住馴し人々の行末をも聞、今一度君の御言傳をもや承と思ひ、所縁
ありて是に此程侍りつれ」というところは、長門本の「君の御名残、かた
じけなく思召て、今一度龍顔に近付参らせばや」とも類似しているが、そ

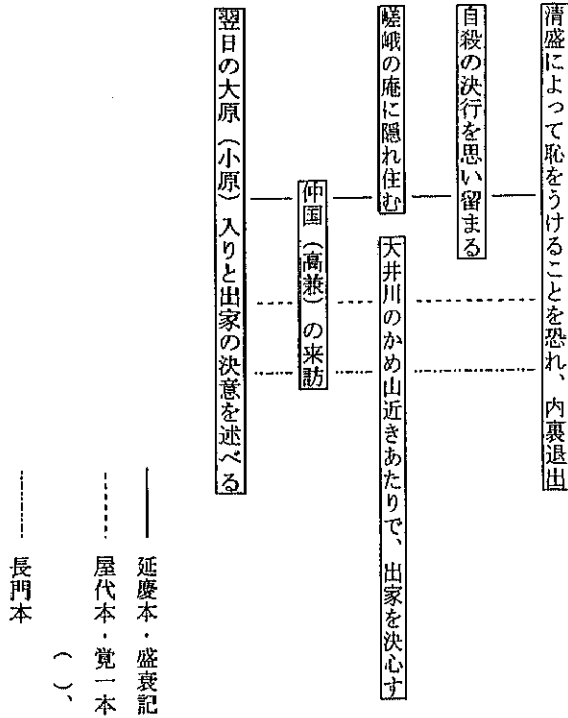
れが「傳を承事もなし」い現実には気付いて、「思へば中々身も苦し」と嘆き
になつてくると、自分で振り捨てた俗世であつたにも関わらずそれへの未練
に悩む女人の造型で、忍従的・受身的な造型性を呈している。たとえば、
その直前に「いづくのいかならん所にてても、我身一人こそ消も失なん」と
いう自殺の決意がほめかされているのだが、「我身一人こそ消も失なん」と
つぶやく小督は「我も憂目を見ば、君の御為も御心苦し」いことを案じ
ての、あくまでも愛する高倉帝に迷惑をかけまいとする自己犠牲の決意で
ある。それは、延慶本の「此世ニナキ者ト人ニ被知」ようとする気丈さと
は対照的で、ここにも忍従的・女人造型をうかがうことができる。

その造型をもつて諸本の形成論的な視座からみると、物語的には過渡的
位置にあると思われる延慶本の小督は、「産む性」と「貞女」という二面性
をかかえていた。しかもその「貞女」という儒教的概念には、一方に家に
殉ずる側面があり、それとともに、いま一方ではあくまでも、夫（高倉帝）
の立場を立てようとする側面が見られた。この造型から考えると、巻六に
移った延慶本以外の諸本における小督の造型には、夫（高倉帝）の立場を
思いやつてひたすら自己犠牲をうけとめるという、忍従的・受身的・女人造
型が前景化していることに気づかされる。そのことは逆に見るならば、そ
の反面において延慶本的な多面性へのまなざしが後退したことが暗示され
るといえる。それは、延慶本以外の諸本では院政期の後宮に対する権勢者
の画策といった生々しい政治状況描写の方向性は見られない。延慶本に強
く見られる、小督造型のこのような変容はそのまま王朝的・女人造型から院
政期という時代を背負った中世的・女人造型への移行を反映しているとみて
無理はないであろう。

第二節 小督物語の主題、その変容——小督の出家——

盛衰記における小督の告白は、やがて出家の決意へと結ばれていく。それは他諸本においても同じだが、ただ、隠れ住む嵯峨の生活からさらに出家の決意へと展開してゆく筋立を探ると、あらためて注目されるのが盛衰記の構成である。

まず、小督の出家をめぐる筋立を主な諸本の構成を圖表化することで、問題の所在を確認しておこう。仲国にみつかるまでの諸本の構成を段階ごとに分けてみると、次のようになる。



右のようなプロットの展開において、問題となる点は二つである。一つは延慶本・盛衰記に見られる自殺の決意と、その断念のプロットであり、

いま一つは、嵯峨の草庵住まいから大原(長門本「小原」)の奥へ入って出家しようとする動機である。

諸本のなかでは、延慶本・長門本・覚一本が類似している。すなわち、この三本は「さてもあるべきならねば、あすより大原のおくにおもひつた事のさぶらへば(覚一本)と、ただ出家の決意が語られているだけである。そこには、隠れ住んでいた嵯峨から、さらに山奥の大原へと出家する理由、或いは動機がうかがえない。それに対して、盛衰記には、出家に至る心理の流れがはっきりと表れている。「如何にも成べかりしか共、住馴し人々の行末をも聞、今一度君の御言傳をもや承と思ひ、所縁ありて是に此程侍りつれ共、傳を承事もなし、思へば中々身も苦し、明日よりして大原の別所に思立事候て」という箇所がそれである。内裏を忍び出て嵯峨に隠れ住んでも、「住馴し人々の行末をも聞、今一度君の御言傳をもや承りたい」という願望が生ずるだけで、俗世への未練は捨てきれないままであった。結局、小督の出家は「是に此程侍りつれ共、傳を承事もなし、思へば中々身も苦し」いためであった。すなわち、自分と帝に降りかかる乱を逃れて都を離れた周縁(嵯峨)に隠れ住んでも、彼らからの便りはなく、その現実の非情さにかえて社会から疎外された惨めな自分に気づくだけであった。それゆえに周縁をさらに越えた大原での出家を決意したのである。この待ち続ける小督の姿にあくまでも受身的・忍従的な女人造型が認められて、盛衰記の特色として貫かれている。それとともに、盛衰記のこのような心理描写の綿密さが、他諸本の構成とは相違した特色であると考えられるのである。

次に長門本における小督の告白を見てみよう。

まことに君の御名残、かたじけなく思召て、今一度龍顔に近付参らせはやと、御心弱く思召なられ出家もし給はず、たへかねてすだれの際

より、我は是にあり、世の中ものうく、恥しきこと有るべしと聞えしかば、おそろしきまゝ迷ひ出たり、(中略)我は今宵計ぞこれにあらんずる、明なば小原の奥に、おもひ立事有と計にて、御深押へ難き気色にて、すだれより外まで聞えければ……

長門本の小督の告白は、他本の小督の告白とは多少違う状況下で展開されている。延慶本・盛衰記・覚一本において仲国が尋ねてきた時の小督の状況は、延慶本が述べるように、「今マデ思煩テ」「ツレナクカクテ」隠れ住んでいたのを、「明ナバ大原ノ奥ニ尋入」つて出家をと思ひ立つたところであつた(ただ、延慶本のみは自殺を思い止まる小督が描かれている点、両本と異なる)。それに対し長門本は、小督が高兼(他本では仲国)に自分が内裏を忍び出た動機と嵯峨の生活を語る前に、他本には見えない次のような独自記事の状況描写があつて、この記述を介在すによつて筋立ての差異が生じてくる。

何となく迷ひ出しかば、如何成ものにかこゝろを通はすらんと、思召候はんも淺まし、此世幾ほどならず出家して、後世を願はんとして、既に戒の師を受けて、御ぐしをすまし袈裟ころも用意して、只今髪をそらんとし給ひけるが

このように長門本は戒師を招いて、いましも出家しようとする場面を構成している。すなわち、長門本では、内裏出奔も「世の中ものうく、恥しきこと有るべしと聞えしかば」という、小督を案じたある人の言伝で(聞へ)によつて決行されたのであつた。そしてこの記事で「戒の師を受けて、御ぐしをすまし袈裟ころも用意し」とあるから、いましも出家しようとした小督は、内裏出奔の当初から出家を予定していたことになる。このような造型が、「内裏ヲ迷出候シ時ハ、イカナラム淵川ニ身ヲナゲテ、此世ニナキ者ト人ニ被知」ようとした延慶本や、「我身一人こそ消も失なんと思

ひ、内裏をば潜在忍出ぬ」という盛衰記に見られる自殺の意図を不要にしたとみられる。長門本の小督にとっては、内裏出奔がただちに出家へとつながっていることからして、内裏出奔が出家への覚悟の行動として受けとれるのである。

ところで、さきほどの延慶本と盛衰記の間に見られた対照的な小督の造型は、覚一本では次のように対応している。

入道相国のあまりにおそろしき事のみ申とき、しかば、あさましきなりに、内裏をばにげ出て、此程はかゝるすまひなれば、琴などひく事もなかりつれ共、さてもあるべきならねば、あすより大原のおくにおもひたつ事のさぶらへば

ここには、清盛からの脅迫、内裏出奔に至つた経緯をなぞつて語る小督の告白があるだけで、自分の処した現状に対する自分の思いは語っていない。延慶本の告白からうかがえた清盛に対するの恨みも、盛衰記に見られた受身的人物造型も、或は自殺決意も見られない。覚一本は、小督の内面の叙述を通して物語を組み立てるといった構想を施していないし、これは、覚一本が小督という女人に焦点をあてた物語ではないことを意味する。すなわち、その叙述の焦点は高倉帝のほうに移っているのである。このことはかつて中西美智子氏が、平家物語の構成に関して、重盛、高倉帝、清盛の死に関連する各々その生前の逸話を扱った章を分類したが、それと関連している。それは、「入道逝去」に関して「経の島」「慈心坊」「祇園女御」があり、巻三の重盛の死(章としては「医師問答」)に関しては「無文の沙汰」「燈籠」「金渡し」が語られたのと同様、高倉帝に関しては「新院崩御」を中心として「紅葉」「葵の前」と「小督」の章が語られたと考察されたものである。覚一本のこの小督の告白は、中西説とつながってくる。すなわち、覚一本は、巻六に収載されたその位置からして、高倉帝をめぐ

る女人関係の逸話、あるいは高倉帝の哀傷を指摘した一章段としての性格を明らかにしているのである。

しかし小督の出家の意志は遂げられず、仲国によって内裏に連れ戻され、やがて姫宮の誕生をみることになる。まず、延慶本で小督は、高倉天皇の勅命により召し返されて一女をもうけた頃、折悪しく清盛に察知されてしまう。これについては既にふれたが、史実と物語の懸け橋となるフィクションであると稿者は考える。すなわち史実によれば、小督の内裏退出から出家までは一年以上にわたる月日の空白があった。物語の作者はその空白を利用して、まず将来の皇子誕生を背後に秘めた宮中における人間関係の緊張と葛藤のプロットを作り出した。すなわち、高倉帝が小督を寵愛したことによって、娘中宮徳子がないがしろにされたことによる清盛の怒り、その結果としての、小督の内裏追放の画策、その画策を恐れての内裏出奔、というプロットがそれである。それらプロットの連鎖は、どの妃から第一皇子が生まれるのかという宮中にとつては最大の関心事に支えられて、物語をリアリティとスリルあるものに仕上げている。しかしすでに調べてみた史実では、小督が高倉帝の一子（娘）を産んだ後に内裏を退出していた。その史実を物語に組み込むとき、一旦内裏を出奔したが、見つけ出されて内裏へひそかに戻され、高倉帝の寵愛を受けて一子をもうけたというプロットを設定したと思われる。このようなプロットの加上・増補によって高倉帝の寵愛の深さと純粹さを強調する効果も増したとも考えられる。

さて考察を延慶本の清盛と小督の関係に戻すと、小督が帝の娘を産んだことを察知した清盛は「汝ハ世ニモ不憚、入道ニモ不恐シテ、中宮ノ御心ヲ奉悩コソ不思議」であるとして、「自ラカミラシ切テノステ」という仕打ちをされる。その時小督は、「大原ノ奥ヘモ尋入テ、吾ト様ヲモカヘタラ

バ、心ニク、テ可有ニ、無由モ再被召帰テ、恥ヲ見ツル悲シサヨ」と嘆くものの、その嘆きは

今生ハカリノ事、一旦ノ恥モナニナラズ。後生ハ終ノ栖ナレバ、浄土ヲコソ願ハメトテ、終大原ノ奥ニ分入テ、柴ノ庵ヲ結ビ、一向念仏シ給ケリ

と、ただちに求道・出家へとつなげていくところが他本と異なっている。ここの場面が、「恥ヲ見」たことから一転して求道へと向かう文脈には注目される。すでに前節で見た小督の気丈さは、清盛に「カミラシ切テノステ」られる仕打ちをされたことによって、「今生ハカリノ事、一旦ノ恥モナニナラズ。後生ハ終ノ栖ナ」とただちに悟る造型に展開している。惨めな身の上を一転して「大原ノ奥ニ分入テ、柴ノ庵ヲ結ビ、一向念仏」しようとして決意するわけである。ここにはこれまでの延慶本の考察で見てきたように、高貴な女人でありながらも意外な気丈さを持ち前に、落ちこぼれた境遇をただちに克服しようとする意欲が認められる。

延慶本において女人の（恥）の意識は、遊芸者の祇王や武士の妻の小宰相にも著しいことを前掲の論稿を通して考察してみたが、宮中女房の小督にも例外ではなかった。既に見た「とき清盛の残酷な仕打ちに、「大原ノ奥ヘモ尋入テ、吾ト様ヲモカヘタラバ、心ニク、テ可有ニ、無由モ再被召帰テ、恥ヲ見ツル悲シサヨ」と、いまの結果を来した自分への責めにも「恥ヲ見」たことへの恨みが先立つ小督であった。他者の強制によって出家させられ、宮中から放逐される小督にとつて「恥」とは、己の生を自己意志によって左右できないと悟らされたときに感じる感情であった。つまり、「吾ト様ヲモカヘタラバ、心ニク、テ可有ニ」という言葉をふりかえると、「吾ト」すなわち進んで自らの意志に基づいて出家を志していたのだし、それは「心ニク、テ可有ニ」という自己の新たな生の価値に気付いたこと

であった。つまり、みずから生を決定する生き方こそ価値があるという認識だったのである。

すなわち、逆境を發条(バネ)として新たな生を求めて草庵生活に入り、俗世における「自力の生」の挫折を反転させるため、俗世から離れた大原での新たな「自力の生」を追求する。それが「浄土ヲコソ願ハメ」という目的に、「一向念仏シ給」といった新たな生を生きることだったのである。このように女人の劣機性を克服しきる女人として、小督の造型がつかぬかれていますと考えるのである。「恥」が時代の規範と結びついているために、その規範を越える価値(往生)の発見によって「恥ヲ見」たゆえの嘆きやがては「一旦ノ恥モナニナラズ」という意識の逆転をもたらすことになる。その新たな生の行き着くところが出家者として「日來ノ念仏ノ功積り、臨終正念ニテ、往生ノ素懷ヲ遂」という女人往生であったわけである。

以上、延慶本の「恥」から出家に至る小督の意識をたどってきたが、それは祇王・仏・小宰相とはまた違う、盛衰記の叙述によれば「この女房と申は大職冠の御孫(中略)竜顔に近付進らする上は、国母后に祝れ給はん事も難るべきにあらず」といわれた女人が一人の権勢者によって「引出シツ、自ラカミヲシ切テノステ」る難に遭うような極限の状況下での女人の姿であった。しかしこのような帝に仕える宮中女房の造型にまで、恨みの内在された「恥」が出家を促すということは、前述したごとく、延慶本が女人造型に設けた明らかな意図と読み取るのが妥当であろう。

一方、盛衰記では、「小督殿、我再憂目にあはんより、此次にこそいかにもならめと宣ひけるに、主の女房、共に様々誘申ければ、泣々内裏へ帰給ふ」という経緯で高倉帝との再会がなされる。内裏に帰ることによって「再憂目にあ」うことを恐れた小督であったが、案の定、清盛によって強引に出家させられることになる。その場面は、

入道何としてか聞附給ひたりけん(中略)小督失たりとは君の御虚言にてありけるぞ、未内裏に候なり、急ぎ召出して可失とぞ宣ける。季定承、所縁を以て小督殿をすかし奉り、入道に角と申しければ、流石女などを失なはん事は世の聞えも不穩便たゞ姿を替て追放て、さてぞ君は思召捨させ給はんずると宣ひければ、季定承り、目もあてられず思ふけれ共、東山の麓清閑寺と云所に具足し奉り、姿を替させ奉る

と描かれているが、ここにはそれまでの個性をもつ人物としての小督の造型は薄れている。「季定承、所縁を以て小督殿をすかし奉り」から小督の出家の経緯までを描くこの箇所は、すべて清盛の側からの視点で捉えられていて、小督の心理は映されていない。ただ、小督にとつてきわめて不当で嘆かましい状況であることを、地の文で

かく龍顔に近附進らする上は、国母后に祝れ給はん事も難かるべきに
あらず、平家は下国の守をだにもさらはれて、只今家を起こしたる人
ぞかし、さまでの振舞情なしとぞ人唇を返しける

と付け加えている。これは人の口をかりて清盛の横暴を指弾することで、これによって小督の悲惨な状況を救い取ろうとした意図と見える。その指弾の論理は、宮中に入内・出仕する女人の《家》に関するものである。注意してよかるう。この箇所をもって、この物語の葛藤・対立の根底にある、院政期貴族社会の身分意識に基づいた家柄・家格の争いをうかがうことができるのである。以上のように、盛衰記は卷六相当の構想に合わせて主題を移行させているが、その原型が延慶本主題の《皇統》と《家》という問題にからまっていた痕跡をも受け取れる。

盛衰記においては、「姿を替て追放て、さてぞ君は思召捨させ給はんずる」という清盛の言葉によって、高倉帝の心から小督を消すのが清盛の望みであったことがわかる。つまり、清盛の怒りは小督ではなく、高倉帝に

向けられていた。それは「小督失たりとは君の御虚言にてありけるぞ」という個所にも表れている。そこには、帝に向けられた清盛の怒りが認められ、小督への怒りはうかがえない。この対立の構図からみて、盛衰記は忍従的で受身的な宮中の女人小督が権力者に犠牲にされる話として貫いてきた物語の末尾に、その権力者清盛と帝の葛藤を語るることによって、主題を移していったと考えられる。

ここにおいて小督は、その高倉帝と清盛の葛藤の原因としてしか描かれていない。それに前で考察した小督という女人造型が忍従的・受身的といった王朝物語的な傾向をみせることと関連させれば、いわば中古以来の物語の伝統が盛衰記の人物造型を規制したとも考えられるのである。物語の流れを振り返ってみると、延慶本の小督の気丈さ、逆境を一転して求道へと転回させるたくましさ比べて、盛衰記の小督が受身的・忍従的な造型になっているのもそのためである。「我身一人こそ」消えてしまえば、愛する高倉帝は安穩であろうというつぶやき、そして「今一度君の御言傳をもや承りたいというせめての願いがかなえられなかった時」「是に此程侍りつれ共、傳を承事もなし、思へば中々身も苦し」とい出家を決意する場面に、小督の忍従的・受身的な造型が判然とみとめられたのであった。盛衰記が小督の悲劇から、清盛と帝の葛藤へと主題を移していった時、小督の存在は葛藤のはざままで悲しい運命に振り回される女人造型として、たとえば、源氏が朱雀院に頼まれて女三の宮を迎え入れる時、正夫人の座を追われる上、その夫の新婚三日の用意までをもする紫の上が六条院の秩序を取り乱さないため涙を忍んで忍従するように、自分の処した境遇にひたすら忍従する王朝物語におけるヒロインの造型に回帰したのである。

このような描き方が覚一本においては次のように表わされている。
入道相国何としてかもれきひたりけん、「小督がうせたりといふ事、あ

とかたなき空事なりけり」とて、小督殿をとらへつゝ、尼になしてぞはなつたる。小督殿出家はもとよりの望なりけれ共、心ならず尼になされて、年廿三、こき墨染にやつればてて、嵯峨のへんにぞすまれる

ここで注目されるのは、すでに前述したような覚一本の内面描写を省く叙述である。諸本の小督には、その人物の性格がうかがえる内面描写がなされているが、覚一本にはそのような描写はない。この場面からも、前述したような、高倉帝を中心にした物語群に位置づける意図、すなわち小督という人物の個性より、天皇の豊かな資質を語る出来事としての意図が一貫していると見てよからう。

即ち、これと連鎖して覚一本に顕著なことは、覚一本をはじめとする語り本系が、巻六の最初の章段から「新院崩御」をもつて話を展開させており、続く「紅葉」「葵前」「小督」にいたるまで高倉天皇の説話群になっているのは再三いうまでもないが、権勢者清盛の横暴の描写に重点が据えられている延慶本に比べて、語り本系の中でも覚一本は清盛による被害者としての高倉帝の姿よりは、治天の君としての資質を浮き彫りにする意図が強く感じられるということである。それは自ずと清盛の天皇への權威の侵犯という横暴さを縮小させている造型性につながっている。

たとえば、本格的に高倉帝の私的な描写の発端になる「紅葉」において、
覚一本は

ア、ゆふにやさしう人のおもひつきまいらするかたも、おそらくは延喜、天曆の御門と申共、争か是にまさるとぞ人申ける。大かたは賢王の名をあげ、仁徳の考をほどこさせ在ます事も、君御成人の後、清濁をわかたせ給ひてのうへの事にてこそあるに、此君は無下に幼主の時より性を柔和にうけさせ給へり

と、同じく高倉説話群に位置する語り本系の百二十句本には見えない下線の内容を組み込んで帝への称賛を試みているし、清盛の横暴談としての傾向の強い延慶本にも、

大方ハ賢聖ノ名ヲ揚、仁徳ノ行ヲ施シ御ス事、皆君成人ノ後、清濁ヲ分タセ給て、難有哀ナリシ御事共コソ多カリシカ(延慶本)

とあるように、覚一本をのぞく各諸本の本文は大きな異動を見せない。結局「延喜・天曆の御門」の類例として上げる高倉帝に対して、権勢を振るう清盛であつても、その治天の君としての権威に挑む造型としては浮き立たせないのである。延慶本の考察に際して先述したような、娘中宮を召さないつまり、皇統継嗣の問題にかかわる—高倉帝への清盛の怒りを語る系の諸本は一切描かないのだが、それに代わつて、清盛の帝への感情は次の二個所に表出されているだけである。

入道相国是をきき、「君は小督ゆへにおぼしめししづませ給ひたんなり。さらんにと(ツ)ては」とて、御かいしやくの女房達をもまいらせず

と、自分の意のままにならない帝への清盛の対応を描く葛藤の発端がそれで、ここにおいては諸本が殆ど同じだが、物語の末尾に、清盛の怒りが小督に噴出される場面においては、以下のような相違をみせている。

イ、大政入道如何シタリケム・此事漏聞テ・君ハ小督カ失タリト云御事ハ
・無跡形事ナリ・其儀ナラハト・常ハ宣ケルカ・小督殿ヲ・タハカリ
出シテ(屋代本)

入道相国、何としてかもれきひたりけん、「小督がうせたりといふ事、あとかたなき空事なりけり」とて、小督殿をとらへつゝ(覚一本)

ここの「其儀ナラハト・常ハ宣ケルカ」という文は、百二十句本においても見え、覚一本にだけ見えない箇所である。一見、些細な相違ともこれ

るこの文を、(ア)に見られた覚一本の相違と関連付ければ、ここにおいて覚一本は、天皇の権威にたいする清盛の生々しい感情を極力抑えようとしたと捉えられるのである。そしてそれが、「小督」という章段名を用いながらも、主人公の女人の心理描写に気を配らない物語の流れと考え合わせれば、治天の君、帝の説話群としての完結を試みた覚一本の方向性として一貫するのである。

第三節 小督の出家の彼方に立ち現れる新たな女人造型

——むすびに代えて——

宮中女人の小督は、院政期という時代にその権力争いの中心にいた権力者清盛の二人の嬪、隆房と高倉天皇の想い人であつたがゆえに波瀾万丈の人生を送らなければならなかつた。

まず、史実と物語から推してみられる小督の、女人というセクシュアリティに課されるのは宮廷政治と結びつく女人の(産む性)の問題と(貞女)という役割であつた。それは、小督と帝の間を皇統という(家)、すなわち共同体に介在していた規範から説明される。小督は帝(天皇家)への貞節のために、内裏出奔の後も「隆房ニ心ヲ通」すであろうという君の疑念を晴らすよう、自分の(産む性)を封印する方法として、死、あるいは出家を決意する女人であつた。このような一方に家に殉じ、一方に夫の立場を立てる、(貞女)という儒教的概念に従う小督には自己犠牲の造型が明らかである。それは王朝時代の忍従的で控えめな宮中女人の造型ともみられるが、単に前時代的なものへの回帰とするには、特に延慶本のような小督造型に見られる多面性には眼を瞑つてしまふことになりかねない。物語にフォーカスされる人物への時代的解釈が、もはや逆戻りできない変化を来していることを勘案せねばならない。従つて、小督が覗かせる自己犠牲

の造型は、成立しつづつあつた中世封建体制が求めた女人造型と一致したものであつたという基底から出発すべきであろう。同時に、女人のセクシュアリティーそのものが物語の主題に浮上してきたということは、院政期頃から中央進出が目立つ武家社会女人の役割との関連性もうかがわせる。

以上のような小督の造型考察で気づくことは、武家の台頭と同時に男の論理が先行する中世の封建体制と妥協しつづつ、いずれどのような形でも自己意志を貫こうとした積極的な女人造型を成したことで、それは物語成立の時代が要求した女人造型の露呈でもあつたということである。

諸本それぞれが目指す人物の造型が異なっていたが、延慶本の小督の造型においてはその時代性が特に顕著であつた。知らないうちに、皇統の後継争いに巻き込まれ、権勢者の意に反する存在となつた小督は、それを自覚することで人生の転換期を迎える。稿者の注目する延慶本の独自性また時代性は、その転換期を内裏出奔と出家の実行につなげる意識の根拠を探ることから判然とした。

自分の難を「乍生恥ヲ見」ることと表現し、また「此世ニナキ者ト人ニ被知」と抵抗意志による内裏出奔の理由を明かす小督の造型には、運命に任せて自己を放棄せず、それに立ち向かおうとする毅然さが窺える。とすれば、「世中ノウラメシサ、身程ノハツカシサ」という述懐はその抵抗意志の延長、即ち清盛に対する恨みで、このような心理は小督に潜在された気丈さの現われとして解釈するしかない。この気丈さ、或は明確な意思表示の根源になるものが自分に降り掛かる難を、まず「恥」としてうけとめる意識であつた。これは合戦の場、或はさし迫ってくる難に対して、武将たちが武將たらしめるその「捷」を守れなくなつた時に感じる屈辱（「恥」）に比類したもので、それが女人小督の造型にまで投影されたと考えるのである。延慶本に顕著な時代性というのは、このような女人造型にまで影響

を及ぼした武士の行動倫理を読み取ることから理解できる。それは、「加藤二有クレドモ、小督局、「吾内裏ニ被召テ参ナム後、争御後グラク、カ、ラムフシヲ見ルベキ」ト、心ツヨク思ナシテ、急取、ツボノ内ヘソ投出シ給ケル」という「貞節」のために強情な行動をみせる発端部から一貫したものであつた。

実際、小督は自己の行動、そして清盛の脅迫を内裏（後宮）という共同体の掟に照らしたとき、二重のかたちで「恥」を自覚させられたのである。それゆえに、他者の力によらず、みずからの意志で内裏を逃れ出たのである。そして、再び参内して清盛による恥辱を受けたときもそれを「恥」と意識し、「吾ト様ヲモカヘタラバ、心ニク、テ可有ニ、無由モ再被召帰テ、恥ヲ見ツル悲シサヨ」と自発的な出家を怠つたことを悔いながらも、持ち前の気丈さで「今生ハカリノ事、一旦ノ恥モナニナラズ」という発展的な方向に進んでいく。

それは逆境を発条（バネ）として、俗世における自力の生の挫折を反転させ、「浄土ヲコソ願ハメ」という目的で、俗世から離れた大原での新たな自力の生を追求することであつた。このように女人の劣機性を克服しきる女人として小督の造型がつらぬかれているのである。「恥」が時代の規範と繋がっているゆえに、その「恥ヲ見」たがゆえの「悲シ」みを、その規範を越える価値（往生）の発見によって、やがては「一旦ノ恥モナニナラズ」という意識に逆転させたのである。

稿者は延慶本の小督を気丈で激情的な一面をうかがわせる女人とみなした。それは中世の院政期を時代背景とした、「産む性」と「貞女」といった女人のセクシュアリティーに負わされた忍従的な造型と重なつたものであつた。陰房を冷遇しながら帝に「貞女」を徹するその姿の背後に冷徹な院政期以降の後宮の現実をみたのである。それは、熾烈な政治的争いを潜り

抜けながら、(家)の論理を最高とする院政期の社会的なシステムに妥協する姿を身で示したものとみたのである。小督における(恥)の意識の内在本質としてそれらの造型と縁遠いものではなかった。すなわち、それは当時の武士的な倫理観といえる(恥)の意識が女人、小督の造型にも浸透し(編著者が武士到来の時代にあわせた女人造型にしあげ)たことで、院政期以降の後宮の現実と有機的に関係しながら小督という女人造型に表象化したものとみられる。それは延慶本においてもっとも顕著であったが、以上のようなところにこの物語が露呈する時代的な示唆点があると見るのである。

【注】

- 1 小松茂人『中世軍記物の研究』桜楓社、一九六二、一一〇—二頁
- 2 富倉徳次郎『祇王・解説』『平家物語全注釈 上巻』角川書店、一九六六／佐々木八郎『女性たち』『平家物語 日本古典鑑賞講座第十一巻』角川書店、一九五七
- 3 拙稿『小督物語—『平家物語』諸本間における主題の変容をめぐって—』『文学研究論集』第20号、二〇〇二、三発刊
- 4 石母田正氏の『古代末期政治史序説』(未來社、一九五六)／『院政期の特質について』『石母田著作集』(岩波書店一九八九)等に盛んな論争を提起した林屋辰三郎氏(『院政権の歴史的評価』院生と武士『古代国家の解体』東京大学出版会、一九五五)の論も両期たる院政論の代表的なもので、本稿における院政の概念定義に参考にした。
- 5 黒田俊雄『中世の国家と天皇』『岩波講座日本歴史 五』岩波書店、一九六二／『日本中世の国家と宗教』岩波書店、一九七九
- 6 河内祥輔、『古代政治史における天皇制の論理』吉川弘文館一九八六／『後三条・白河』『院政の一考察』—『都と都の中世史』吉川弘文館一九九二
- 7 元木泰雄『院政期政治史研究』思文閣、一九九六、頁二九〇
- 8 石母田氏の前掲書、『古代末期政治史序説』第三章平時政權とその没落』による説。
- 9 橋本家雄『性の神』一九七五、淡交社
- 10 『恥の意識』を論じられる際によくいわれるのが(リチャード・エヴァンス著、大田充訳、『現代心理学入門 上』講談社、一九八三から参照)、自分と神との関係で発生するとされる『罪の意識』に対して、恥の意識は自分と他の人間との関

係で生れるということである。他者の目を考えて、恥ずかしいと思うことである。その罪の意識は自分の属する家族や共同体が長く守り、自分の中に受け継がれた約束事に反する行為をしたときに生れる、社会的な色彩が濃いものである。即ち、共同体という他律の原則、規範に基づくものである。

『平家物語』における「恥」の意識は従来、武士の時代の形成期において台頭しはじめた規範たるものとして論じられて、たとえば、武久聖氏の『平家物語における「恥」の形成』(『国語と国文学』昭和三十九年三三)の論稿でも扱われているのだが、女人の造型においては問題にされるまでもなかった。稿者は祇王、小宰相の女人造型の考察(『平家物語の女人造型と「恥」—祇王を中心に—』筑波大学平家部会論集 第四集一九九二、「文化的多様性の現象として位置づける日本古典文学の再考—平家物語に現れた規範意識を中心に—』『日本文学報 第五〇輯』韓国日本学会、二〇〇二、二)を通じて、物語の形成における中世期の規範たるものの女人造型への反映を検討してみたところであり、本稿もそのような主旨に基づいていることを断っておく。

11 『山槐記』の治承四年四月十二日条「今日初齋院 御年四才、新院第一御女内親王也、母權中納言成範女、号小督殿、即新院女房也、生宮之後不参、去年冬為尼、生年二十三也、有子細敷、不知其由」とあって、出家を治承三年のこととしている。この論稿のために主にあつた諸本の位置を整理して、十二巻本を基準にして言えば、

・ 第巻三に相当する位置：屋代本、

・ 第巻六に相当する位置：寛一本、百二十句本(ただし、「第五十三句 葵の女御」という章段名で、高倉帝の葵、小督といった一連の恋愛談として編成されており、巻三に「第二十八句 小督」と章段名だけが残っている)、延慶本(第三本)、長門本(巻十二)、盛衰記(巻二十五)

以上のように配置されている。稿者の前掲(注3)の論考において、延慶本は物語の構想についての検討から、延慶本が本来は屋代本のような年代的な事実の順にそって巻三に相当する重盛の死につぐ話として位置したであろうが、それが寛一本のような巻六相当に配置され、高倉天皇崩御説話群に編入されたことを推測したわけである。これをもって巻三から巻六に編入される際の過渡的形態として考えたわけである。

13 中西美智子、『平家物語成長変化の一断面屋代本「小督」と他本との関係』『文学語学』一九五八、六

14 前掲(注3)の拙稿で、小督が高倉帝の一子(娘)を産んだ後に内裏を退出していることを論証した。